



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

悪性の疑い度別にみたマンモグラフィーの診断成績

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 望月, 亮三 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/15300

氏名（本籍）	望 月 亮 三（静岡県）
学位の種類	博 士（医学）
学位授与番号	乙 第 9 7 6 号
学位授与日付	平成 7 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	悪性の疑い度別にみたマンモグラフィーの診断成績
審査委員	（主査）教授 土 井 偉 誉 （副査）教授 岩 田 弘 敏 教授 佐 治 重 豊

論 文 内 容 の 要 旨

近年、わが国の食生活や社会環境の欧米化によるとされる乳癌の死亡数の増加、および死亡率の上昇が著しい。藤本らは、西暦2000年には、女性では、乳癌は胃癌を抜いて最も多い癌になると予測している。このような現状の中で、乳癌の画像診断に対する期待もますます高まるものと予想される。現在乳癌の画像診断は、マンモグラフィーと超音波診断が主力となっており、この両者によって全乳癌の90%が診断されているといわれるが、実際の臨床の場においては診断に苦慮するものも少なくない。そこで申請者らは、当科におけるマンモグラフィーの診断能を、マンモグラフィー上での悪性の疑い度別に5段階に分けて検討し、誤診例においてはその原因を検討した。

研究方法

1981年6月1日から1993年12月31日までの間に当科にて初回検査としてマンモグラフィーを行った全女性症例3040例を対象とした。検討は、マンモグラフィーの施行以前に生検による組織確認のための検索が行われていない3013例（対象グループA）と、マンモグラフィー施行以前に生検により癌の組織診断がなされ、癌残存の有無の確認のためにマンモグラフィーを行った27例（対象グループB）とに分けて行った。各グループの症例を、マンモグラフィー上で悪性を疑う所見の強さにより、確実な悪性と考ええるもの（疑い度5）、悪性が強く疑われるもの（疑い度4）、悪性が疑われるもの（疑い度3）、良性の疑いだが悪性を否定しえないもの（疑い度2）、悪性の所見を認めないもの（疑い度1）に分類して検討した。

研究結果

- 1) グループAのうち疑い度5, 4, 3, 2, 1の判定はそれぞれ197, 63, 94, 193, 2466例あり、このうち、組織所見の得られたものは、それぞれ174, 58, 77, 189例（合計562例）であった。
- 2) グループAにおいて、各疑い度ごとの、組織の得られた症例における悪性の頻度は、疑い度5 99.4%（173/174）、疑い度4 89.7%（52/58）、疑い度3 43.8%（28/64）、疑い度2 27.3%（21/77）、疑い度1 12.7%（24/189）であった。
- 3) グループAで組織の得られた症例のうち疑い度3までをマンモグラフィー上での悪性の診断とすると、sensitivity 84.9%、specificity 83.7%、accuracy 84.3%であり、さらに、疑い度2までをマンモグラフィー上での悪性の診断とすると、sensitivity 91.9%、specificity 62.5%、accuracy 78.1%であった。

4) グループBでは24例に組織学的な検索がなされ、19例に癌の残存が見られた。疑い度別に見た結果では、疑い度3以上の症例9例のうち8例で組織が得られ、7例(87.5%)に癌の残存が見られたが、癌の残存していた19例中12例では積極的に癌を疑う所見は得られなかった。

5) グループAにおいて疑い度5と4での偽陽性例は、不整形陰影から癌を疑ったものが多く、これらの症例の組織は乳腺症であった。疑い度3での偽陽性例は、腫瘤陰影の不整さや辺縁の不鮮明さから癌を疑ったものが最も多く、これらの組織は乳腺症および線維腺腫であった。疑い度3で、石灰化から悪性を疑った偽陽性例は、乳腺症と壁の石灰化した嚢胞であった。

6) グループAにおいて疑い度2および1での偽陰性例は、乳腺陰影に隠れて病変の存在が不確実であったり、病変の存在を指摘し得なかったものが多かった。

論文審査の結果の要旨

申請者 望月亮三は、乳癌の診断を目的として実施したマンモグラフィー3040例をretrospective に検討し、初回受診者のうち組織診断の確定した562例についてマンモグラフィーの診断精度を評価した。悪性所見の描出度を5段階にわけると、疑い度の強い5および4の範囲ではpositive predictive value 97.0%が得られ、さらに、疑い度3までを含めても85.5%であった。本研究の成果はマンモグラフィーによる乳癌診断の基準設定に新知見を加えたものであり、同時に乳癌集団検診システムの構築に少なからず寄与するものと認める。

[主論文公表誌]

悪性の疑い度別にみたマンモグラフィーの診断成績

平成7年1月発行 岐阜大医紀 43(1): 81~88